

個別的自己開示の対人魅力に及ぼす効果

中 村 雅 彦

他者が行う自己開示 (self-disclosure) が、その他者に対する魅力にどのような効果を及ぼすのかという問題については、一貫した結果が得られていない。

Worthy, Gary & Kahn (1969) は、内面的な開示を行う人物の方が、表面的な開示を行う人間よりも好まれるという結果を得ている。しかし、Ehrlich & Graeven (1971) は、自己開示の内面性は、魅力に効果を及ぼさないという結果を見出した。さらに、Cozby (1972) は中程度に内面的な開示を行う人物が、表面的な開示を行う人物や非常に内面的な開示を行う人物に比べて有意に好まれるという知見を得ている。

以上の研究は、自己開示の内面性が対人魅力に及ぼす効果を限定するような要因が関係していることを示唆するものであると言える。そのような要因として、自己開示の内容の望ましさ (Dalto, Ajzen & Kaplan, 1979)、自己開示を行う事態の適切性 (Derlega & Chaikin, 1976)、自己開示を行うタイミング (Wortman, Adesman, Herman & Greenberg, 1976) などが挙げられる。中でも見落してはならない変数に、他者の開示の原因について被開示者が行う帰属作用が挙げられる。これは、開示者の開示の原因が、開示者の被開示者に対するポジティブな意図に帰属されるとき、開示者に対する魅力は高くなるという仮定に基づくものである。この命題は、Jones & Davis (1965) の対応推定理論から導かれる。Jones & Davis は、知覚者の行為者に対する評価は、その行為の快楽関与性 (hedonic relevance) と個別性 (personalism) によって決定されると主張している。ここで快楽関与性とは、行為者の行為が知覚者の目的・利益を充足する (妨げる) 程度に関わる変数のことである。また個別性とは、行為者の行為が特定の知覚者の存在と共変する程度に関する変数のことである。Jones & Davis (1965) によれば、快楽関与的で個別的な行為を行う人物は、快楽関与的で非個別的な行為を行う人物よりもその行為の意図や行為者の傾性が明確に知覚され、行為者に対する評価が極端になると予測される。本研究では、これを個別性仮説を名付けることにする。

Jones & Archer (1976) は、自己開示と対人魅力との関係について、この個別性仮説の検証を行なった。

個別性は、さくらが3人の人物 (3番目に開示を行なう人物が被験者) に対して行う開示の内面性が、被験者と他の2人とで異なるかどうかによって操作された。しかしながら結果は、仮説を支持するものではなかった。被験者にだけ内面的な開示を行うさくらと、被験者にだけ内面的な開示をすることを控えるさくらが共に最も好まれたからである。このような結果が得られたのは、一つに被験者にとって開示者から開示を受けることの快楽関与性が低かったからかもしれない。このような問題を踏まえて、本研究では先行研究とは異なった事態を設定して個別性仮説を検証することを目的とする。仮説によれば、内面的で個別的な開示を行う人物は、表面的で個別的な開示を行う人物よりも好まれるが、内面的で非個別的な開示を行う人物と表面的で非個別的な開示を行う人物との間には好意性に差が見出されないであろうと予測される。

実験 I では、自己開示の個別性を開示者の開示の内面性を被開示者によって変動させることによって操作した。36名の男子大学生が被験者として参加した。開示の内容と内面性を統制する為に、7名の男性のさくらを用いた。実験は、さくらが被験者以外の人物に対して行った開示の模様を、まず被験者にテープレコーダーで聞かせ (1回目の開示)、その後さくらが被験者と会って開示を行う (2回目の開示) というものである。開示は、さくらが聞き手の質問に答えるという形で行われた。さくらの開示の快楽関与性を明確に設定する為、被験者には聞き手としてさくらからできるだけ詳細にわたる情報を聞き出すことが要求された。開示の内容には、8種類の話題が用意された。内面条件では、さくらは2つの話題について自分の父親がアルコール中毒であることと、自分が高校時代に抑うつ的になった時の経験について語るが、表面条件では、さくらはこれらの話題について開示することを控える。1回目の開示が終了した後、被験者は印象形成尺度にさくらの印象を記入した。また2回目の開示の終了後、被験者は帰属尺度、対人魅力尺度、印象形成尺度にそれぞれ記入した。実験計画は、1回目の開示 (表面的開示 vs. 内面的開示) × 2回目の開示 (表面的開示 vs. 内面的開示) の2要因配置である。

帰属尺度については、2回目の開示の主効果が有意になった。これは、2回目の開示が内面的な条件の被験者の方が、表面的な条件の被験者よりもその原因をさくらの性格、意図に帰属したことを示すものである。対人魅力尺度については、仮説を支持する結果が得られなかった。2回目の開示の主効果のみが有意となった。すなわち、被験者に対して内面的な開示を行うさくらの方が、表面的な開示を行うさくらよりも好まれ、さくらが被験者以外の人物にどのような開示を行ったかということの影響を及ぼさなかった。また、印象形成尺度については、1回目の開示後のさくらの印象が弱く、2回目の開示後の印象も余り明瞭な結果が得られなかった。総じて言えば、実験Ⅰの結果は、さくらの開示の個別性が有効に知覚されなかったことを示している。これは、1回目の開示が被験者に対して与えるインパクトが2回目の開示に比べて弱かったことによるものと考えられる。いっぽう、2回目の開示において被験者は、さくらからできるだけ多くの情報を聞き出すように動機づけられていた。したがって、魅力が内面条件において高まったのは、さくらの行動が被験者にとってポジティブに快樂関与的であったためであると解釈できよう。

実験Ⅱでは、個別性を被験者がより明確に知覚するように、さくらが自分の開示に関して行った原因帰属を被験者に直接伝えることによって操作することにした。また、自己開示の返報性（reciprocity）の問題についても検討を行う為に、被験者にも開示を行なわせることにした。32名の男子大学生が、被験者として参加した。また、7名の男性のさくらを用いた。まず、さくらが被験者に対して開示を行った。さくらの開示の内容は、内面的な話題にまで言及する（内面条件）か、表面的な話題だけに言及して内面的な開示を控える（表面条件）かのどちらかである。さくらの開示が終了した後、さくらは自分の開示の原因を帰属尺度に記入した。自己帰属条件においては、さくらの開示の原因は、さくら自身の性格、意志に帰属される。いっぽう、他者帰属条件では、さくらの開示の原因は、被験者の性格、聞き方に帰属される。被験者は、さくらの記入した帰属尺度を呈示された後、対人魅力尺度と印象形成尺度に記入した。従属尺度への記入が終了した後、今度はさくらが聞き手となっ

て、被験者が開示を行った。被験者の開示の様子は録音され、これをもとにして被験者の開示の内容の内面性と、開示の長さの測定を行った。実験計画は、さくらの開示（表面的開示 vs. 内面的開示）×さくらの帰属（自己帰属 vs. 他者帰属）の2要因配置である。

対人魅力尺度については、さくらの開示とさくらの帰属との間に有意な交互作用が見出された。すなわち、内面的な開示の原因を被験者に帰属するさくらは、表面的な開示の原因を被験者に帰属するさくらよりも好まれた。しかし、内面的な開示の原因を自分自身に帰属するさくらと、表面的な開示の原因を自分自身に帰属するさくらとの間には差が見出されなかった。したがって、仮説は支持されたと言える。印象形成尺度については、さくらの開示の主効果だけが有意になった。すなわち内面的な開示を行うさくらの方が、表面的な開示を行うさくらよりもポジティブに評価された。さくらの印象が、個別性の影響を受けなかったのは、印象形成尺度に記入するにあたって被験者が、さくらの行動の記述的側面に注目したからであると説明できよう。自己開示の返報性については、開示の内面性、開示の長さのいずれの測度についても、実験条件間に有意差は見出されなかった。これは、被験者の開示する内容が、さくらが質問する話題によって制限されてしまったということが一つには考えられる。

このように、本研究では全般的には内面的な開示を行う人物の方が、表面的な開示を行う人物よりもポジティブに評価されることが明らかになった。しかし、実験Ⅱのように、開示者の開示の原因が明白な事態においては、開示の個別性が内面性の効果を極端なものにすることが明らかになった。今後の課題としては、快樂関与性の高低が、この個別性の効果にどのような影響を及ぼすのかという問題を取り上げる必要がある。本研究のように、被開示者が開示者と相互作用を行い、関与性が高い事態では、開示の個別性と内面性が対人魅力に交互作用効果を及ぼすであろう。しかし、被開示者が単なる観察者としての役割を果たすような関与性の低い事態では、Jones & Archer (1976) で得られたような結果が生じるかもしれない。今後の研究によって、この点を明らかにしていく予定である。